

ゆずり葉の 木漏れ日

<特別支援・発達支援>

2026年6月29日発行

第7号

<http://www.yobokyoiku-academy.com/>

巻頭言

3歳の孫が庭でママごと遊びをしています。プリンカップに土と水を入れてかき混ぜ「コーヒーどうぞ」と勧めてくれます。土は、水と混ぜて茶色になりますが、決して溶けることはありません。また、土の粒の大きさによって茶色から透明になる時間が異なります。このような遊びを通した経験は、小学校理科の「物の溶け方」や「流水の働き」につながっていきます。子どもにとって「遊び」は「学び」への架け橋だと思います。

予防教育科学アカデミー理事 堀川 富美



幼児期の「遊び」を通して育まれる 児童期の「学び」を考える



本号では、幼児期の遊びが就学後の学習にどのようにつながっていくのかについて、具体的な事例を交えながら皆さまと共に考えていきたいと思います。

子どもたちの遊びの中には、児童期の学習の土台となる「学びの芽」が日々たくさん育っています。子どもたちにとって、遊びはまさに学びそのものです。今回は、そんな学びの芽を保育の現場で見つけてきました。こうした子どもたちの遊びをさらに豊かにするには、園において、子どもがじっくりと遊び込める環境をいかに作り出せるかが重要となります。

本面では、3名の小学校教諭による「各教科の学びにつなげるための遊び環境のポイント」を、裏面では、「エピソード記録への分析コメント」を掲載しています。本号を通して、「遊び＝学び」であることを実感していただければ幸いです。幼児期の豊かな遊びが、児童期の学びへのスムーズな架け橋となることを願っています。

学びの芽① 「算数」

小学校教諭 仲西 佑香

算数の学びは、数字を覚えることから始まるわけではありません。大切なのは、子どもたちが実際に見て、触れて、試してみたいくなる環境です。葉っぱや木の実を集める、ひたすら積み木を高く積み、泥団子や粘土、基地づくりを楽しむ中で、「どっちが多い?」「重たいな」「入るかな?」と考える場面が生まれます。そして何より、子どもたちが「楽しい!」と夢中になって遊ぶことが大切です。夢中になって遊ぶ中で、数の概念や、かさ・重さ・広さといった量の感覚が自然と育まれていきます。

学びの芽② 「理科」

小学校教諭 岸 太平

幼児期に水や砂、生き物などの自然と関わりながら、五感を使って「なぜだろう」「試してみたい」と感じる体験を重ねることで、観察力や探究心が育ちます。また、子どもたちが自由に比較したり試行錯誤したりすることのできる環境も重要です。繰り返し試すことで、違いや変化に気付き、考えを深めていきます。こうした経験が、児童期の理科に必要な思考力や問題解決能力の基礎となるのではないのでしょうか。

学びの芽③ 「国語」

小学校教諭 林 達哉

小学校学習指導要領解説(国語編)では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉を正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することが示されています(文部科学省, 2017)。このうち、幼児期の遊びには、話す・聞くことを通して、言葉の力を育てる要素が多く含まれています。遊びの中で、身近な人と言葉で伝え合う経験は、話す・聞く力を育てるとともに、後の読み書き学習を支える重要な土台となります。安心して表現できる環境や関係性の中で、言葉の面白さに触れる経験が、国語の学びにつながる「遊び環境のポイント」になると考えます。

エピソード① 「けんちゃんのそら豆」

たんぽぽ保育園の野菜畑では、今年もそら豆がぐんぐんと育ち、先月ついに収穫の時を迎えました。これまで水やりのお世話を続けてきた2歳児クラスの子どもたちが、さっそく皮むきに挑戦！大きさはまちまちながら、立派に育った豆が「ふわふわベッド」から次々と顔を出しました。けんちゃんは、自分でむいた豆を机に一列に並べると、「これはママ、これはにいに、これはけんちゃん…」と一粒ずつ指をさしながら、嬉しそうに家族の名前を当てはめていました。



学びの芽①「算数」

収穫したそら豆を一粒ずつ並べる経験は、ものを順序よく並べたり数を数えたりする力の土台となります。また、「ママ」「にいに」「けんちゃん」と豆と家族を一対一に対応させる姿からは、数の概念につながる考え方もうかがえます。さらに、豆の大きさの違いに気付いたり比べたりする経験は、量感覚を育むきっかけにもなります。子どもたちは遊びや生活の中で、楽しみながら算数につながる力を育んでいるのです。



学びの芽②「理科」

子どもたちは、ダムをつくるという目的に向けて役割を分担し、協力しながら試行錯誤しています。水を入れると壁が崩れたり、水が染み込んだりする体験から「固める必要がある」と気付き、工夫する姿が見られます。

こうした遊びが自然事象への関心や原因と結果を考える力を育み、児童期の理科につながる探究的な学びの基礎となっています。

エピソード② 「ダムをつくるんよ！」

くじら保育園の砂場では、5歳児クラスの子どもたちがダイナミックな穴掘りに挑戦しています。シャベルにスコップ、バケツに台車と準備も万全です。「なんの穴？」と保育者が尋ねると、「ダムをつくるんよ！」とたくちゃん。「掘る人」「砂を運ぶ人」「水を汲む人」と自然に役割分担ができあがりいよいよバケツリレーで注水開始！

しかし、勢いよく水を流し込むと壁面が崩れ、水も砂にどんどん染み込んでしまいます。すると、「周りを固めんといかんのよ」とかずくん。スコップの背でベタベタ、トントンと壁面を叩いて固め始めました。

エピソード③ 「あやさんの『あ』！」

梅雨の晴れ間、さくら幼稚園の年長組の子どもたちは、近くの公園まで散歩に出かけました。道すがら、よっちゃんの何気ない一声をきっかけに「あ」のつく言葉探しが始まりました。子どもたちは「アイス」「あり」「あさがお」と次々に「あ」のつくものを見つけていきます。そろそろ出尽くしたかなと思ったそのとき、さらちゃんが、「あ！あやさん（保育者）の『あ』だ！」と声を弾ませて保育者のあやさんを指さしました。それを聞いたクラスの子どもたちは「本当だ！」と大盛り上がりでした。

学びの芽③「国語」

散歩中に始まった「あ」のつく言葉探し。子どもたちが言葉の「音」に注目し語彙を広げていく大切な学びの場面だと感じました。さらちゃんが「あやさんの『あ』」に気づいた瞬間、子どもたちは「ものの名前」から身近な「人の名前」へと視点を広げ、言葉の世界が一段と広がります。一般名詞と固有名詞の違いを自然に捉え始め、その発見を友だちと共有することで、言葉の面白さを感じるとともに、音韻意識の芽生えにもつながっている様子が垣間見えるエピソードですね。



予防教育科学アカデミーでは、子育てや教育上の困りごとの相談を常時メールにて受け付けています。皆さまからのご相談に応じて専門家がご答えいたします。下記までどうぞご相談ください。

ご相談窓口：yobokyoiku.academy@gmail.com（お名前は必ずご記入ください）

【お問い合わせ】

特定非営利活動法人 予防教育科学アカデミー <http://www.yobokyoiku-academy.com/>

